藤原宮木簡の世界―東面北門周辺の木簡―

木簡は、その時代に生きた人の生の声を伝えてくれる、貴重な資料です。藤原宮木簡は、大宝令施行前後の変革期を生きた大宮びとの横顔を、あざやかに照らし出してくれます。

現在、藤原宮跡から出土している木簡は、16,000点あまり。その4分の1にあたる約4,000点が、東面北門（山部門）周辺の外濠や内濠等から見つかっています。その内容は、宮内省（くないしょう）・中務省（なかつかさしょう）やそれらに所属する役所にかかわるものと、天皇やその周りの人々が口にしたとみられる海産物等に付けられた付札（つけふだ）に大別することができます。

今回は、奈良文化財研究所創立60周年と藤原宮跡資料室土日祝日開室を記念して、4月7日から5月6日までおこなった企画展示「埋（うず）もれた大宮びとの横顔－藤原宮東面北門周辺の木簡」から、代表的なものをご紹介しましょう。

（都城発掘調査部　桑田 訓也）

フナのししびしおの付札　「鯽」はフナ。「醢」はししびしおと読み、今日の粕漬けあるいは塩辛の類と考えられます。とても丁寧な作りで、文字も非常に端正です。

長さ一五〇㎜・幅二五㎜・厚さ五㎜

ナツアワビの付札　「夏鮑」は、夏に採れた旬のアワビという意味でしょうか。藤原宮で作られた整理用ラベルと考えられますが、あるいは、志摩国（現在の三重県東部）から送られた贄（にえ）の荷札かもしれません。

長さ一一七㎜・幅一五㎜・厚さ二㎜

銀銭にかかわる木簡　小さな断片ですが、あなどるなかれ。上の二文字は、左に金偏を補って「銀銭」と読むことができます。和同銀銭の出納にかかわる資料の可能性があります。

長さ（九四）㎜・幅（九）㎜・厚さ三㎜

※写真は、すべて実寸大です。
欠損があるものは、長さ・幅に（　）を付けています。

醤と末醤を請求した文書木簡　「今すぐに必要なので、醤（ひしお）と末醤（まつしょう）を支給してください」という意味のことが記されています。表の末尾から裏の冒頭にかけて、「醤及末醤」と見えます。醤は醤油の原型、末醤は味噌の原型となる調味料です。請求したのは、裏面末尾の「馬寮（めりょう）」（馬の飼育を担当する役所）。請求先は、大膳職（だいぜんしき）（大宝令施行前なら膳職）でしょう。今すぐにと言いながら慌てた様子はなく、一つ一つの文字を丁寧に書いています。

長さ一八九㎜・幅三二㎜・厚さ四㎜

（表）

（裏）

藤原宮の門の名前を記した木簡　「多治比山部門」と書かれています。「多治比（たじひ）」門は藤原宮の北面東門、「山部（やまべ）門（もん）」は東面北門にあたります。藤原宮は約一㎞四方の広さをもち、各面に三つずつ、合計十二の門が開いていました。それぞれの門には多治比・山部のように氏族の名前が付けられており、警護を担当した氏族の名に由来すると考えられています。

長さ（一八〇）㎜・幅（一二）㎜・厚さ四㎜